跳

タマップダンス公演 2022

「跳べ！いっそ踊ってしまえ！」報告書

令和4年度埼玉県障害者芸術文化活動普及支援事業

はじめに

本公演に至るまでは、長く険しい道のりがありました。
絵画などの表現活動を仕事にする重い障害のある仲間たち。彼らの新たな表現の発掘として、身体表現を取り入れるべく、みぬま福祉会では6年前からダンスワークショップを実施してきました。その講師として、埼玉県加須市を中心に活動を展開するダンスグループ「ベストプレイス」主宰の竹中幸子氏を招き、導かれ、ちょうど2年前に舞台公演の開催を目指しました。
しかしこの2年の間に、コロナ禍という未曾有の苦しみが起き、さらには一緒に踊ってきたメンバーとの突然の悲しい別れもありました。延期を繰り返しながらも、この舞台に立つ日を心待ちにしてきた仲間たち。そしてこんな状況だからこそという思いが込められた「跳べ！いっそ踊ってしまえ！」という舞台のタイトル。政府から配られたマスクを装飾したり、ソーシャルディスタンスというこれまで聞いたこともない言葉をダンスに取り入れてみたり……。私たちの試行錯誤が続きました。
いかなる逆境や障害があっても、誰かとつながっていたいという思いや、表現することへの純粋な欲求。熱い想いが詰まった2年間のワークショップと、舞台に上がった濃密な2日間を本冊子にまとめました。

タマップダンス公演2022「跳べ！いっそ踊ってしまえ！」
2022年5月20日（金）14:30開演　彩の国さいたま芸術劇場小ホール　全席指定・観覧無料
出演：タマップダンサーズ、ベストプレイス

Program

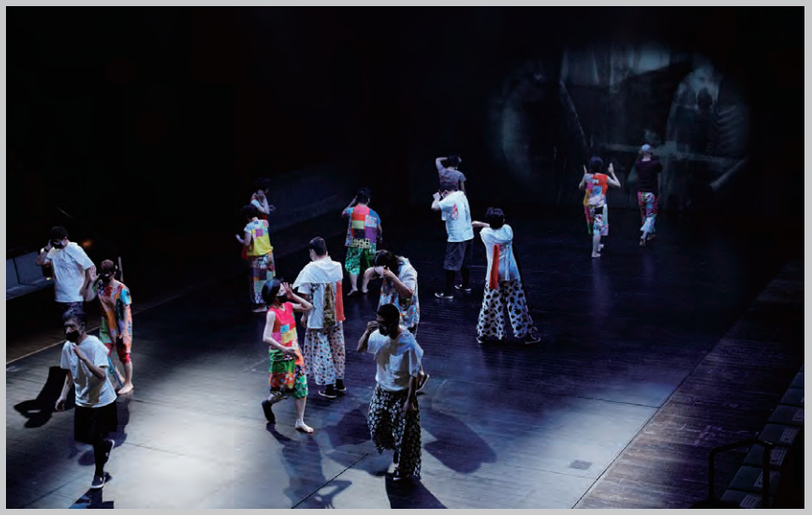
scene1	プロローグ
scene2	こんなに長(なが)くなった手(て)
scene3	ソーシャルディスタンス的(てき)ダンス
scene4	踊(おど)らずにいられない〜 僕(ぼく)の大好(だいす)きな曲(きょく)
scene5	せんす
scene6	のうだま
scene7	編(あ)み続(つづ)けて、いきつづけて
scene8	エピローグ

作品提供・小道具作成
【衣　装】……片波見 知代
【扇　子】……高谷 こずえ
【のうだま】……納田 裕加
【毛糸の巻き物】……安田 拓海
【ステンドグラス】…伊藤 裕

写真で振り返る、タマップダンス公演2022「跳べ！いっそ踊ってしまえ！」	4 −17
出演者の言葉	18−21
支援者の言葉	22−25
タマップダンスワークショップ2020-2022	26−27
寄稿文	
「跳べ！いっそ踊ってしまえ！」を拝見して …… 砂連尾 理	28
「跳べ！いっそ踊ってしまえ！」を鑑賞して …… 寺山 由美	29
「跳べ！いっそ踊ってしまえ！」と背中を押された …… 八木 ありさ	30
来場者の言葉	31
「境界を熔かす人」のこと …… 竹中 幸子	32−33

本書は、2022年5月20日に彩の国さいたま芸術劇場で開催したタマップダンス公演2022「跳べ！いっそ踊ってしまえ！」と、公演に向けて行った約二年間に渡るダンスワークショップの様子を記録した報告書です。

言葉ではうまく言えないけれど



私を認めてもらえてるような気がする

一緒にいると

惜しくも公演目前に天国へと旅立った高谷こずえさんは、
舞台上のスクリーンでよみがえり、見事な踊りを披露しました。

がんばらなきゃって思う

タマップダンス公演をふり返って

真っ赤な衣装が、
かわいかったです

電車の
ダンスが好き

阿部 美幸
あべ みゆき

TAMAP dancers

本番のステージでは、良いダンスが踊れたと思います。ヘアセットで初めて髪の毛に「きんきら（ラメ）」を付けたり、毛を格好よく立たせたのが気に入りました。衣装は片波見さんが作ってくれました。嬉しかったです。安田くんと竹中先生の編み物のダンスが好きです。高谷さんは太陽の家の仲間。いっしょに踊れて良かったです。みんなで踊るのが大好きです。これからも踊っていきたいです、疲れちゃわないように踊りたいです。

納田 裕加
のうだ ゆか

TAMAP dancers

初舞台。
夢が実現して
泣いちゃった

少し前に入院したときは、「ダンス間に合うかな」って不安だったけど、退院したら安田くんが「帰ってきた！」って言ってくれたのが嬉しくて、がんばろうっていう気持ちになった。
自分の作品「のうだま」と一緒にステージに上がれたのが嬉しかった。みんなの糸の動きを見るのは初めてで嬉しかったし、「のうだま」を続けてきて良かったなと思った。
ダンスが一番好き。みんなでおじぎして、万歳して、泣いて。本当に良かった。

関 翔平
せき しょうへい

TAMAP dancers

本番の公演はちょっと緊張もしたけど、楽しく踊れました。メインで踊る〈せんすのダンス〉では、せんすの持ち方を工夫して、和をイメージしながら体全体を動かしました。好きなシーンは、伊藤くんが電車のダンスを踊るまえにずっこけるところ。２回ずっこけて、3回目は本番だからしっかり踊りました。面白かったなあ。
公演の後、お母さんが「また公演してほしい」と言ってくれたので、もっと頑張ってその想いに応えたいです。

安田 拓海
やすだ たくみ

TAMAP dancers

10年ぶりにステージに立ちました。学生時代に文化祭のステージで踊って以来です。今回の会場は「小ホール」だったけど、すごく広かったです！
竹中先生と長い編み物を持って走るシーンは、テンションが上がりました。とても楽しかったです。ぼくは耳が聞こえないけれど、まわりで踊っている人たちのいろいろな心が聞こえてきました。感動しました。

ステージでは、
みんなの「心」が聞こえました

伊藤 裕
いとう ゆたか

TAMAP dancers

１番好きなのは〈電車のダンス〉。左右の手をクロスさせながら、リズミカルに飛び跳ねる。〈糸のダンス〉もした。〈身体の一部をかくすダンス〉もできるようになった。楽しかった。
ダンスの練習は、いっぱいした。頑張って披露したダンスは、（総合施設長の）松本さんに見てもらえた。

片波見 知代
かたばみ ともよ

TAMAP dancers

舞台で踊ると、アイドルになった気分で最高だった。かなり緊張したけど、みんなのことも見えたし、踊っているときは楽しかった。公演に向けて、11人分の衣装をミシンで縫った。結構大変だったけれど、今度は髪飾りも作ってみたい。いつか大きなホールのランウェイで、ファッションを披露したい。
こずえが生きてればなぁ。天国からダンスをする形になっちゃって、一緒に踊れないのが辛かった。またいつか、一緒にステージに立ちたい。

お母さんの想いに
応えたい

本番は、
髪を青く染める
って決めたの

62歳の初舞台に
興奮した

空を
飛ぶように踊った

素晴らしいものを
みんなと創りあげる
ことができた

西川 泰弘
にしかわ やすひろ

TAMAP dancers

本番前は体力的に自信が無かった。でもいざ本番になると、「自分を見てほしい」っていう気持ちが入って、楽しく踊ることができた。練習と本番は全然違って、舞台は素敵で、とても気持ちのいい場所だった。実際に立ってやっと分かった。
若いころは辛かった、こんな舞台も想像できなかった。ダンスはアートだ。いろんな人に、いろんな場所で、機会で、自分を見てもらえるチャンスができたらいいと思う。

長谷川 昌彦
はせがわ まさひこ

TAMAP dancers

目や耳を隠すダンスでは、手で輪っかをつくって逆にのぞきながら踊った。みんなを見ながら踊った。
両手を横に広げ、ぐるぐるとまわりながら踊った。空を飛ぶように踊った。
高谷さんと一緒にせんすを持って踊った。せんすは扇いでみたり、背中に当ててみたり。キジ、コンドル、うみねこ。鳥のように踊った。
流れ星みたいなライト。でかい拍手。みんな揃って、みんなで踊った。

豊田 亜紀
とよだ あき

TAMAP dancers

本番を迎えることができるなら万々歳、もし迎えられなくても「このワークショップで経験したみんなとのセッションは最高だった」と納得はしていました。でも、やっぱり舞台に立てたことで「みんなの思いや力が１つになった！」と感じることが出来ました。
私にとってダンスは、言葉で伝える以外の方法で、たくさんのことを交わし合うことが出来る手段だと思っています。

白田 直紀
はくた なおき

TAMAP dancers

ダンスを通じて、ぼくはみんなと仲良くなることができた。最初は緊張したし、不安もあった。でもダンスに誘ってもらったり、大好きなサッカー柄の衣装を作ってもらったりして、本番は笑顔で楽しく踊ることができた。
本番は高谷さんの動きを意識しながら踊った。高谷さんに言いたいことは山ほどあるけど、「ぼくと西川さん、がんばったよ」と伝えたい。

ヤマダジュンヤ

TAMAP dancers

直後はやり切った感じでしたが、一晩休んだら不思議とまだ終わってない感覚になりました。また、みんなと表現したいです。
自分にとってのダンスは、身体を動かして色々な気持ちにさせていただくエッセンス。

ダンスは、
「成長」
「楽しい」

笠原 京
かさはら きょう

Bestplace

この度は、タマップ公演に参加させて頂きありがとうございました。ずっとずっと延期でようやく！花開かせることが出来、本当に嬉しかったです。
もともと私は言語コミュニケーションが得意ではなく、ストレートに自分のことを伝えられる身体表現をしておりました。今回の公演においても、初めましてさんだらけでしたが、言葉に頼らない飾らない対話をする事で、あっという間にお友達になれて、感情を共有出来て、リハーサルも本番も、本当に充実してキラキラした時間を過ごさせていただきました。
本当にありがとうございました。

みんなのダンスが
熱かった！

延期の先に
ようやく花開いた！

石をパーンと
割って踊った！

本番は、ドキドキわくわく

心と心が
つながった！

小林　興直
こばやし　こうなお　Bestplace

初めて行ったときは知らない人が多くて、みなさんがこっちを見ました。
ぼくは石になってしまいました。
ダンスが始まるとみなさんがかっこよかったので、ぼくは石をパーンと割って踊りました。
本番は、みなさんかっこよかったのでうまくいくと思っていました。
ぼくもかっこよく踊りました。とても楽しかったです。
ぼくはダンスが大好きです。

小林　芽美
こばやし　めみ　Bestplace

なんて素敵なタイトルでしょう！
本当にそんな気持ちになりました。
みなさんの気持ちが表れたプロジェクトだったと振り返っています。
コロナのせいで何回も変更を余儀なくされましたが、そのおかげで長く関わることができました。もうだめかと思う度により熱い思いで集まってこられるダンサーとスタッフです。その熱い空気に私も刺激をうけました。
誰にも真似のできない唯一無二の私。二度と同じ事のない舞台。とっても刺激的なドラマチックなタマップダンス公演でした。踊ること、表現すること、私はここに居るということ。自分を自分でかみしめる時間でした。
納田さんと最後一緒に歩けたこと、繋いだ手からエネルギーが伝わってきました。私にとっての一番の思い出です。これからの人生の糧にします。
私の息子もとても充実した時間だったようです。そして自信をつけたようにみえます。このような機会をいただいたこと心より感謝しています。タマップのプロジェクトは、障害があるなしにかかわらず表現することを身近な当たり前のこととしてくださいました。またお互いを認め合うことができるようになります。ますますこのような活動が広がり盛んになることを願っています。

福田　拡
ふくだ　ひろむ　Bestplace

はじめてみんなに会った時は少し緊張しました。次に会った時はみんなと挨拶することが出来ました。
本番はドキドキワクワクでめっちゃ楽しかったです。またみんなとダンスをしたいです。

福田　京子
ふくだ　きょうこ　Bestplace

のびのびになっていた公演が関わった人全ての方々の思いを乗せて、人数制限はありましたが無事に有観客の公演が出来て本当に良かったという思いです。
2年間の時の流れの中で、さまざまな変化がありましたが、回を重ねる都度、仲間たちの生き生きとした姿を目の当たりにして、私も元気をもらい、少しずつ仲良くなれたかなぁとそんな思いもありワークの時間とても楽しく過ごすことが出来ました。
当日はワクワクドキドキの緊張がありながらもダンサーとなった彼、彼女たちは身体が開放され無駄な力が入っていない、自分らしい表現で体を動かすことの嬉しさが滲み出ていように感じました。
どのシーンもそれぞれとても良かったですが、ワンシーンをあげるとしたら、のうだまの糸を紡ぐパフォーマンスはとてもよい素敵なシーンになっていたと思います。
同じステージは二度とありませんが、またみなさんとその場の空気を感じて舞台に立つことができれば最高！！と思います。ありがとうございました。

渡邉　愛佳
わたなべ　あいか　Bestplace

私はダンスが大好きです。たまっぷのみんなが優しく教えてくれて一緒に踊ってワクワク！楽しかったです。お話もたくさんして、心と心がつながって嬉しかったです。
またみんなで歌とダンス頑張りたいです。

渡邉　充子
わたなべ　あつこ　Bestplace

タマップ公演には親子で参加させていただきましたが、とにかく毎回のワークから、ワクワクしていて楽しく嬉しい時間でした。いつも思うのですが、言葉で話さなくても、自分の気持ちを、身体で表現できるって、いいなぁ。
自信をもってできることがあると生活も気持ちも豊かになりますよね。私もタマップの皆さんから笑顔と元気をもらい自然に体が動いていました。またご一緒にダンスしたいです。ありがとうございました。

なんて素敵な
タイトル！

生き生きとした姿に
元気をもらいました

身体で表現
できるって
いいなぁ

澁谷　智志
しぶや　さとし　フリーランス ダンサー

アシスタント兼出演者として、このプロジェクトに関わらせていただきました。当初は数回のワークショップ後にすぐに本番ということでしたが、新型コロナウィルスの影響もあって、何度か公演延期を経て、結果的に1年半近くもの稽古期間を経ることとなりました。
これまで自分が関わった舞台の中で、1番長い稽古期間となりました。その間、タマップダンサーの方々の集中力は切れることなく、その都度、踊りを純粋に楽しんでいる様子でした。長い稽古期間となったことで、自分がタマップダンサーの方々とどのように踊るのか、よく考えるようになりました。
自分の動きは最小限に留めタマップダンサーの踊りを引き立てるべきなのか、煽るように踊って盛り上げるべきなのか、対話するように踊り関係性を見せるべきなのか、自分がどの場所で踊ると空間全体がよく見えるのか。場面場面でその立場は異なり、いちダンサーとしてとても勉強になりました。
作中では、ダンサーそれぞれが純粋に踊りを楽しみながら、個性いっぱいに踊ってました。それに加え、ダンサーたちが日頃から制作に取り組んでいるアート作品が小道具として登場し、空間を彩りながら、彼らの日常が表出する、とても美しい舞台空間となりました。最後のカーテンコールでのそれぞれがソロで踊るシーンでは、みんな個性を存分に出しきるように踊っており、とても印象的でした。

吉澤　慎吾
よしざわ　しんご　フリーランス ダンサー

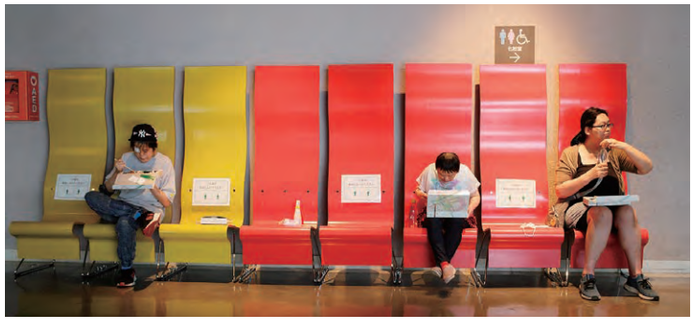
コロナの影響で延期になり２年越での本番。長い様であっという間だった。『延期』というのは予期せぬ事態であったが、延期をしたことで参加した仲間を含めた私たちにとって良い変化をもたらした。延期された期間もリハーサルを行えたことで出演者１人１人の存在がより熟成され深みを増し、日を重ねる毎に、その人がそこにいるという事の重みが増していく様子が目に見えた気がした。
私は良くも悪くも自己肯定感が低く私生活では、さほど明るい性格ではない。そのため昔の私は自分が何のためにこの世に存在しているのか分からなかった。しかし「舞台」という物に出会えたことで人生が一変した。舞台上では、自分が確かに「存在」している事を肯定されている様で、何より嬉しかった。
元々俳優だけを目指していたが、ひょんなことから「ダンス」という物に出会った。言葉ではなく自身の「身体」で表現し、自己の存在が「ここにある」と再認識させてくれる。そんなダンスとの出会いが私の人生を大きく変えてくれたのかも知れない。
「ダンスは生きること、そこにいることを確認すること」という本公演の振付家である竹中幸子さんの言葉が正に的を射ており、そんな「生きていることを確認する」作品であった。
この公演に出演した私を含めたダンサーが、自分の存在と言う確かな物を感じつつ、そこ（舞台）に立っていたのではないだろうか。表現者として自身の原点にも立ち返る様な、素晴らしい機会を頂くことが出来た。歩みを止めず、次に踏み出す１歩の糧としたい。

杉江　尚子
すぎえ　なおこ　舞台監督

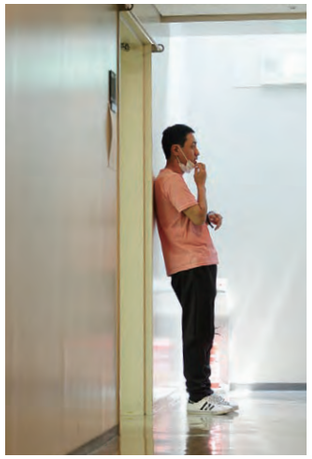
皆が輝いていた、見ごたえのある公演だった。コロナ禍で実現までには実に多くの月日を要した。ダンサーズ銘々にとって悲喜こもごもの日々であっただろう。それでも彼らの中にはずっとダンスが在り続けた。本番を迎えるまでの間、一人一人が自身のダンスへの想いを深め、確実に自分のものにしていった。「どう踊るか」から「どう見(魅)せるか」というダンスになっていったように感じた。
そして、ダンサーズを支えたスタッフも素晴らしかった。舞台袖のスタッフは、進行表を握りしめ担当のダンサーに出番を伝え、てきぱきと小道具類を設置した。ダンサーの心身の変化にいち早く気づき、すぐに寄り添い言葉をかけた。映像スタッフは、志半ばで現地に来られなかったダンサーを芸術劇場のステージ上に見事に蘇らせた。照明、音響、撮影等のプロの方々も作品を深く理解してくださった。その他、心温まる会場づくり等々、見えないところでダンサーズと共に頑張っていたスタッフのチームワークも、公演の成功に欠かせないものだったと思う。
このプロジェクトに関わるすべての人たちの想いが結実した公演だった。皆、コロナの猛威に決して屈しなかった。諦めなかった。諦めなくて、本当によかった。

彼らの日常が表出する
美しい舞台空間

「生きていること
を確認する作品」
であった



私たち現場の支援スタッフは、舞台袖で演者を励まし背中を押すことしかできませんが、いつも仲間の表現する力を信じて送り出していました。舞台上では先生やダンサーさんが彼らの力をすーっと引き出してくださり、私たちの支援と舞台表現が繋がったように感じる瞬間でした。（青木）



公演本番。初めての場所に不安を感じる人や、テンションが上がり過ぎて舞台裏で走り出す人も。大丈夫かな、と心配しましたが、みんな舞台の上では素晴らしいダンスを踊っていたことに安心しました。今回のダンスワークショップに参加して、仲間だけでなく、職員同士の関係性も深まったと感じています。（石渡）

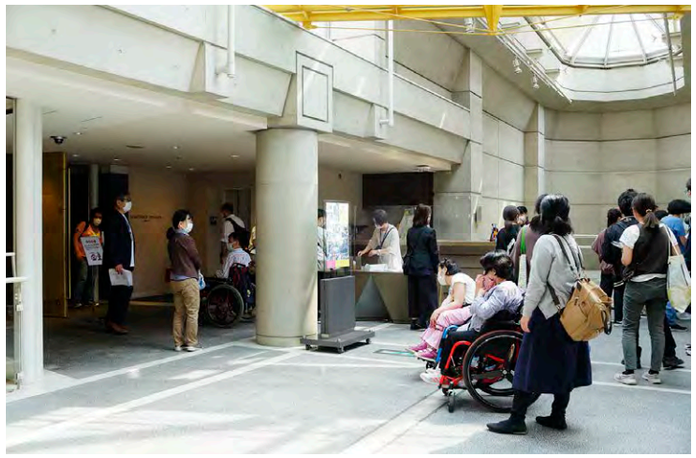
＜タマップダンサーズの一員として＞

この舞台に辿り着くまでの長い道のり。竹中先生の導きと仲間たちの想いによってさまざまな困難が芸術に生まれ変わる、奇跡の瞬間を一番近くで見させていただきました。豊田さんのアイディアで付けられた「いっそ踊ってしまえ！」というタイトルは、コロナ禍を照らすこの希望の舞台を正に言い表していました。

公演までの２年間の練習の様子を記録してきましたが、高谷さんの映像はこの日の為に撮影していたのかと思ってしまうほど鮮明に残っていて、彼女の舞台に立ちたいという強い願いを感じ取り、その出演をサポートする大役を引き受けました。気が付けば、自分もダンサーズの一員として出演していたような気がして、一生忘れられない公演となりました。（小嶋）

ダンス公演の３日前に裏方として参加することが決まり、不安いっぱいの私でした。でも、舞台で力いっぱいダンスをしている仲間たちの姿を見て勇気と感動と元気をもらいました。当日は無事にビニールテープで綺麗な丸を描くことができ、同じ舞台で参加できたことを嬉しく思いました。舞台が終わって「またやりたい！」と言っている仲間たち。再び舞台の上でダンス公演ができる日が来ることを願っています。（赤羽）

公演当日は、晴れ舞台に駆けつけてくれたスタイリストによるヘアメイクやカメラマンの撮影も。



ふだんから仲間との関わりを大切にしていた竹中先生は、一人ひとりの良さを存分に引き出した公演プログラムを考えてくださいました。それに対して仲間たちは、現状の踊りに満足せず、納得するまで試行錯誤を続けました。自分自身を表現しようとする様子は美術の創作活動にも似ていて、ある種の「使命感」も感じます。

演者、スタッフともに初めての舞台公演。本番は「一瞬にかける喜び」を共有することができました。本当に素晴らしかったです。今後はより多くの人に向けて、ダンスワークショップを広げていきたいと思います。（宮本）

【講師】竹中幸子先生（ベストプレイス）【場所】埼玉県障害者交流センター（埼玉県さいたま市浦和区大原3-10-1）

【日程】

2020年	2021年	2022年
8/8 ,	7/7 , 7/17 ,	1/19 , 1/26 ,
9/12 , 9/18 ,	11/13 , 11/17 ,	4/27 ,
10/3 , 10/6 ,	12/1	5/11
11/4 ,		
12/9 , 12/12		

※赤の文字は、みぬま福祉会川口太陽の家（埼玉県川口市木曽呂 1374）で開催

ワークショップの模様を
動画で公開中

「跳べ！いっそ踊ってしまえ！」を拝見して

砂連尾　理　じゃれお・おさむ

当日配布されていた冊子の中に本公演の演出・構成を担当されている竹中幸子さんがメンバーとの関わりを次の言葉で言い表しています。

“「作品を創るためにダンスをしていたわけではなかった」という大切なことを思い出させてもらった。彼らの作品が見せるためのものではなく生きることそのものであると同様に、私たちにとってダンスは生きること、そこにいることを確認することだった。”

私がその日の公演で拝見したダンスの全てが正に竹中さんのこの言葉に集約されているものでした。メンバーが、舞台表現のために踊っているだけでなく、むしろ舞台を通して、彼らの瞬間瞬間を懸命に生きる姿がダンスを通して溢れ出す、そして、そんなかけがえのない一人一人の生をそれぞれが踊ることによって確認し合う、そんな素晴らしい舞台になっていたように感じました。
シーンは８つのシーンによって構成されています。全てのシーンに充実したダンス、関係性がそれぞれ紡がれていましたが、中でも舞台中盤、「せんす」と題された、高谷こずえさんの映像とそれに寄り添うように踊っていた澁谷智志さんのダンスは素晴らしいものでした。高谷さんがこの公演を前に天国に旅立たれたということを私は舞台前のアナウンスで知りましたが、そういった感傷的な出来事とは関係なく、映像から繰り広げられていた彼女のダンスは素晴らしく、それが映像であることを忘れてしまうほどに圧倒的な存在感がそのダンスから放たれていました。また、高谷さんというその場にはいないけれども、かつて存在した彼女との時間を慈しみながら何かを語りかけるように踊る澁谷さんのダンスは、メンバーの心の中にはいまだ生き続けているであろう彼女の存在を確認する、そして、それは澁谷さんのダンスなのだけれど彼の想いだけでなく、皆んなの想いが彼の身体を通して現れてきているようなダンスに感じられました。私はそんな彼らのダンスに接し、タマップダンサーズが取り組んできたダンスは目の前のメンバーを確認することだけでなく、不在の在である死者という存在にも開かれているように感じられました。
舞台上のダンスに圧倒されながらも、舞台が進行するにつれ、それと呼応するように客席から発せられる熱気、掛け声が会場からもどんどんと沸き起こっているように感じられました。いつの頃からか、私は舞台を観ながらも、それに呼応して客席から生まれる身振りと声にも目と耳が奪われていき、遂には一体どちらを見ているのか良く分からなくなりました。そう思うと、この日は不在の高谷さん含む舞台上の人たちだけでなく、客席に座っていた人までもがダンサーとなって、舞台、客席の分け隔てもなく、それこそ作品のタイトルが如く、跳べ！いっそ踊ってしまえ！と、心踊らせ、身体を振るわせている、そんな想いが会場全体に広がっていたように思います。

（プロフィール）
1991年、寺田みさことダンスユニットを結成。近年はソロ活動を中心に、ドイツの障がい者劇団ティクバとの「Thikwa＋Junkan Project」、舞鶴の高齢者との「とつとつダンス」等。2008年度文化庁在外研修員としてベルリンに滞在。著書に「老人ホームで生まれた＜とつとつダンス＞―ダンスのような、介護のようなー」（晶文社）。立教大学・映像身体学科　特任教授。

「跳べ！いっそ踊ってしまえ！」を鑑賞して

寺山　由美　てらやま・ゆみ

今回、タマップダンス公演2022「跳べ！いっそ踊ってしまえ！」を鑑賞する機会を頂きましたこと、心からお礼申し上げます。私は普段、大学でダンスを研究・指導している者です。僭越ながら、公演を鑑賞した感想を述べさせて頂きます。
私が公演を拝見して感じたことをキーワードで示すと、＜境目がない＞＜アート＞＜丁寧＞＜本当のこと＞の４つでした。

〈 境目がない 〉
通常の舞踊公演だと、舞台と客席には境目があります。これは空間上当然なのですが、客席にいる私は、お客という立場で舞台を見るのが普通です。しかし今回の公演は、自分が舞台上にいるような錯覚に陥りました。何だか境目がないのです。境目がないのは舞台と客席だけではありません。踊り手と観客の境目、障がいのある人とない人の境目、生きている人たちと亡くなった方の境目など、いろいろな境目が曖昧になる不思議な空間を体験しました。

〈 アート 〉
「アート」とは何であるかを、私はよくわかっていないかもしれません。でも、この公演は「アートってこういうことか」と、所々に感じることができました。例えば、パッチワークの衣装の一つ一つを見た時、「赤と黄色の布は逆の方がよかった」など、あそこを変えたらもっとよいと思えるところが無いように思えたのです。配役や全ての分量もピタリと収まって、完璧な調和となっている。たまに聞こえた客席からのお客の声も、作品には必要なのではないかと思える程でした。これは面白いことだと、純粋に思いました。

〈 丁寧 〉
飲食店や喫茶店に行ったり、ホテルに泊ったりする時、丁寧なお料理やサービスに出会うと嬉しくなります。お坊様のお経や、丹精込めて育てられた野菜など、丁寧なものに触れると心が整って良い気持ちになります。丁寧なものは、人を幸せにしてくれると思います。今回の公演もそのような感じを受取りました。誰もが丁寧に何かをしてくれている。踊り手の皆さんは、丁寧に表現してくれていました。糸を紡ぐ踊り手のなんと丁寧なこと！きっと踊り手の皆さんは、日頃誰かに大事にされているから丁寧なのではないでしょうか。私が拝見したのは1時間半くらいの時間ですが、それを支える毎日の姿が透けて見えた気がしました。

〈 本当のこと 〉
たまに花を花瓶に飾りますが、最近の花は水を替え忘れても枯れません。多分、薬で枯れないようになっているのだと思います。世の中は、見栄えはよいが嘘であることも多いように思います。SNSなどで他者とつながるようになった現代では、かつてよりもさらに「本当のこと」に触れる機会が減少していることでしょう。この公演には嘘がありませんでした。どの踊り手も精一杯感じて、反応する。嘘のない感応する身体で他者とやりとりしている。このような姿を見られることは感動的であると改めて思いました。

構成・演出をご担当された竹中幸子先生が、このような世界をファシリテートして下さったのだと思います。尊敬の念に堪えません。そして最後に、素晴らしい舞台を作られたご関係する全ての皆様に、心から感謝申し上げます。

（プロフィール）
筑波大学体育専門学群卒業後，筑波大学大学院体育学研究科を修了。専門は，舞踊論・舞踊教育学。現在は特に，「表現運動・ダンス」領域の学習内容の研究を進めている。目白大学人文学部助手，千葉大学教育学部講師・助教授を経て，現職となる。公益社団法人日本女子体育連盟常務理事，舞踊学会理事等を務める。筑波大学ダンス部顧問。

「跳べ！いっそ踊ってしまえ！」と背中を押された

八木 ありさ　やぎ・ありさ

会場に伺うことができず、動画を通して公演の様子を拝見した。

作品の冒頭、「絵を描くことは自分の体の一部だ」「表現は自分をさらけ出せる唯一の道具だ」と、心臓をつかみ出された気持ちだった。自分はある日そうとは知らずにダンスを始めていた。今から思えば、言葉を信用できないという思いが募っていった頃に。それから 30 年以上経ったある日、「あなたにとってダンスとは？」と尋ねられ、「生きることです」と答えておきながら、ちょっと顔が熱くなった。だから、冒頭の真っ直ぐな言葉に、胸がドキドキした。あの時の私の背中を押してもらえたから。

１時間弱の公演は、不思議なフランス映画のようでも、藤城清治の影絵の世界のようでもあり、オシャレで怖くて愛しい。このような表現世界に、舞踊学の専門家としては名をつけたい衝動に駆られる。しかし、名づけると「それ」は私のもとから逃げて行く。

いつかの「私」が忙しなく行き交い、2 本の魔法の棒を持った妖精になり、三文オペラに乗せてソーシャルディスタンス・ダンスでとりどりの境界線やシェルターが生まれそうになるけれど、そしてそれが「世の中」で生きて行くには必要なんだけれど、でも、そんなものは突破してゆく「私」たち。やむにやまれずはみだす心。突き破って生まれる動き。終わらないストーリー。止めどないアイデア。そうであっても約束ごとに満ちていて、その密かなルールと突発がどのようにして共存可能なのか、全てを目撃したいと、繰り返し見る。そして、見るほどに、謎は深まる。

少し前にみた Marco Goecke の Shara Nur という作品でとてもよく似た感覚を持った。彼は別の場面で独自の動きについて「私の生み出した動き・作品が見る人の感情を揺さぶることもある。しかし、これぞ、という動きが生まれた時には、自分でも、それが何を意味するかなんていうことは分からない。自分たちがなぜここに生まれ、何をしているのかを説明できないのと同じように…」と語っていた（YouTube ” Meet the Artist: Marco Goecke” ニュルンベルク国立劇場 , 2021 公開）。

水玉の妖精たちはカラフルで、時に腹を立てている。時に木洩れ陽のように優しく、シャボン玉のように淡くなり、何かの糸を紡ぎ出し、手繰り寄せ、ギラギラのスポットライトにもなってゆく。中盤とラストにセンター奥に現れるスクリーンはモノリスのように記憶やマルチ・パースといま・ここを繋ぎ、「私」は透明になってゆく。

これを作品レパートリーとして再演し続けることは可能なのかな。いやこれは愚問。どんな定番作品であっても、踊る側も観る側もその時を生きるのは一度きり。明日は明日の今を生きる。厚みと粘りのある時間を心の底から堪能した。21 人のダンサー達と、その仲間として大きな翼をもらった竹中幸子さんや杉江尚子さんの、アート魂に脱帽。

（プロフィール）
お茶の水女子大学大学院博士課程人間文化研究科人間発達学選考単位取得退学ののち、日本社会事業大学大学院社会福祉学研究科で博士号取得。現在は日本女子体育大学体育学部ダンス学科教授。研究領域は「ダンス・セラピーの理論と方法」。日本ダンス・セラピー協会理事、舞踏学会理事、公益社団法人日本女子体育連盟会長。ドイツ・ダンス・セラピー協会認定治療的ダンス指導者、日本ダンス・セラピー協会認定ダンスセラピスト。

まさにそれぞれの表現が多様で一人一人の存在を強く感じました。生き様が所作や動きに表れ感じるところが多くありました。ありがとうございます。

ゆるやかなつながりもあり、色々考えました。

最初から最後まで見込んでしまいました。一人一人の個性を活かしつつ、

繋がりを感じる。

生きる力の強さ、大きさを感じました。

コロナの関係で度々延期があったり大変な思いをしてきたにも関わらず、みんな本当活き活きとした表情、そして力強い動きにすごく心奪われました。ありがとうございました。

衣装から１人１人凝っていて素敵でした。皆さん頭のてっぺんから足先まで使って全身で表現していて、真剣ながらとても楽しそうでした。プログラムごとに雰囲気が異なっていて、どの場面も目が離せませんでした。

高谷さんの**映像演出**は、その場に高谷さんがいるようで、見ていて感動しました。客席にお花を配ったのもいいですね。会場に一体感も生まれますし、見ていて華やかでした。

いろいろな表現がクロッシングして、一人一人の表現の魅力があふれてました。

私にも糸が見えました。つむぐ糸。人を結ぶ糸。時間をつなぐ糸。

素晴らしい舞台でした。この舞台を実現していただき、ありがとうございました！

とても素晴らしく、感動しました。

一人一人の想いがひとつになるって、素敵ですね。

自分を大切にして、仲間を大切にしている姿、

涙が止まりませんでした。

これからもがんばってください!!

とてもすばらしい公演をありがとうございました。

1回だけとは言わず沢山の人に見て欲しい素晴らしいものでした。

人が生きること、あり続けること表現を通して

まるで1本の映画を見ているような時間でした。

指先まで表現するってすごい！みんな輝いていました。

「境界を熔（と）かす人」のこと

竹中　幸子　たけなか・ゆきこ

ダンスと関わっていく上で大切にしている文章がある。物理学者寺田寅彦氏の短文集に収められた一文で、過去ベストプレイスの公演でも作品テーマとしたことがある。少し長くなるがここに引用させて頂きたい。

（ここから引用文）

日常生活の世界と詩歌の世界の境界はただ一枚のガラス板で仕切られている。
このガラスは初めから曇っていることもある。
生活の世界のちりによごれて曇っていることもある。
二つの世界の間の通路としては、通例、ただ小さな狭い穴が一つ明いているだけである。
（中略）
ある人は初めからこの穴の存在を知らないか、また知っていても別にそれを捜そうともしない。それは、ガラスが曇っていて、反対側が見えないためか、あるいは、あまりに忙しいために。
（中略）
まれに、きわめてまれに天の焔（ほのお）を取って来てこの境界のガラス板をすっかり熔かしてしまう人がある。

寺田寅彦『柿の種』岩波文庫より

冒頭の「詩歌の世界」を「芸術」と読み変えれば、自分の芸術に対する想いを言い当ててくれているように思いずっと大切に胸にしまっている文章だ。今回タマップダンサー達と作業を重ねるにつれこの言葉が再び心の中で点滅を始めた。何故なら彼らは最後の一文にある「まれな人」に違いないからである。

彼らの踊りに触れ、共に踊り、さらに彼らのアート作品に触れたり制作エピソードにまで話が及ぶと「やはり……」と合点し、尊敬とある種の憧れの感情が湧き起こる。

タマップメンバーはもとより、障害のある方達と踊り続ける限り、私は、境界を熔かす人になる事を追い続け、せめてガラス板の穴の存在に気付く者でいたいと願うだろう。恐らく共に踊らずとも彼らのパフォーマンスに触れた人にとって彼らは境界の向こうを見せてくれる稀有な存在だろう。彼らによって与えられる物の大きさを私達はしっかりと受け止めたい。自分の豊かさのために。

一年間４回のワークとショーイングで終了のはずがコロナ禍による公演延期のため思いがけず長い時を過ごすことになった。幸いにもメンバーの存在意義を肌で感じている素晴らしいスタッフに囲まれ至福の創作時間を過ごせたことを思うと、この災いにも感謝すべきところがあったのかもしれない。

さて、本稿の制限字数もあと数行となった。
長く関わらせて頂いたこのプロジェクトもいよいよここで一段落するのだなと改めて一人一人を思いつつ…筆を置くことにする。

最後に。共に踊れば魂の深いところで共鳴し合えるような素晴らしいダンサーだった高谷さん。悲報に接しても彼女が同じ舞台に立たないとは誰も考えなかった。アートセンター集の小嶋さんによるアイディアと技術で皆の想いが具現化したことに心から感謝申し上げたい。

（プロフィール）
お茶の水女子大学文教育学部表現体育学専攻卒業。聖心女子学院教諭、県立川越女子高校非常勤講師等を経て、ウォルフガングシュタンゲ、アダムベンジャミンらのワークショップに触発され、障がいのある方を含むダンスグループ「ベストプレイス」を 2000年にたちあげる。
クリエイティブアート実行委員会指導者養成コース修了。障がい児デイサービス、港区ふれあいアート事業による区内10数か所の保育園、群馬県女子体育連盟夏期講習会、岡山県女子体育連盟ダンスセミナーなどで健常・障がいの子供や教職員など幅広い人々を対象にダンスワークショップを展開。復興支援として、南相馬での保育園、仮設住宅でのワークショップリーダーの経験を持つ。
自身のパフォーマンス活動に加え、2007年よりベストプレイス単独公演を年一回のペースで開始。

タマップダンス公演2022「跳べ！いっそ踊ってしまえ！」

2022年5月20日（金）14:30開演
彩の国さいたま芸術劇場 小ホール
観客動員数　113人
※感染対策のため人数制限あり。

工房集YouTubeチャンネルにて
ダンス公演全編を公開中!
（都合により、削除する場合もございます）

【出演】

タマップダンサーズ

阿部美幸｜伊藤裕｜片波見知代｜関翔平｜豊田亜紀｜西川泰弘｜納田裕加｜白田直紀｜長谷川昌彦｜安田拓海｜ヤマダジュンヤ

ベストプレイス

笠原京｜小林興直｜小林芽美｜澁谷智志｜福田京子｜福田拡｜吉澤慎吾｜渡邉愛佳｜渡邉充子｜竹中幸子

構成・演出　竹中幸子
舞台監督　杉江尚子
照明・音響　株式会社テイク
写真撮影　武藤奈緒美
映像撮影　渡辺みさ
衣装（ベストプレイス）・ヘアメイク　神山みき
映像演出制作　小嶋芳維（社会福祉法人みぬま福祉会）

主催・制作　社会福祉法人みぬま福祉会

正社

埼玉県障害者芸術文化活動支援センター アートセンター集

障害のある人やその家族、支援者の「創る」「深める」「広げる」「守る」をサポートしています。
福祉、アート、教育、行政、司法などの専門家や専門機関と連携して対応しています。
また、企業等からの障害者アートの活用等の相談も受け付けています。どうぞお気軽にご相談ください。

〒333-0831 埼玉県川口市木曽呂1445（社会福祉法人みぬま福祉会 工房集内）
Tel:048-290-7355
E-mail: artcenter@kobo-syu.com
URL: http://artcenter-syu.com

埼玉県障害者アートネットワーク　TAMAP±〇（タマッププラマイゼロ）

埼玉県内で表現活動に取り組む福祉施設、行政、様々な分野の専門家、作家などによるネットワーク。ダンスワークショップのほか、埼玉県障害者アート企画展などを協働で開催し、障害のある人の表現やその魅力、可能性を発信している。

ベストプレイス

障害を持った方、その家族、ダンスに興味のある方、障害者との活動に興味のある方が集まったダンスグループ。
年齢・性別・障がいの有無の枠を超え、時間と空間を共有し、共に生きることの可能性を探ることを目的とし、2000年から埼玉県を拠点とし活動している。
型にはまった動きではなく、そこにいる一人ひとりの美しさやエネルギーを引き出して、共有し、展開していきながらダンスとして構築する。

本公演開催に向けてご尽力くださった竹中幸子先生をはじめ、多くの関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。

art center syu

https://artcenter-syu.com